

2026年8月9日

説教題『カインの罪 ～対話の否定～』創世記4：1～16 ～創世記②～

主任牧師 加藤 誠

「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」(創世記4章7節)

今朝はカインとアベルという兄弟の間で人類最初の殺人事件が起こった物語を通して、私たちが抱える罪と神が祈り願っておられる平和について聴いていきたい。

アダムとエバの間に生まれた二人の息子、カインとアベル。兄は土を耕す者となり、弟は羊を飼う者となった。時を経て兄カインは土の実りを、弟アベルは羊の群れの中で肥えた初子を神にささげると、神はアベルのささげものには目を留められたのに、カインのささげものには目を留めてくださらなかった。なぜなのか。聖書は理由を一切語らない。後に新約聖書のヘブライ書が「信仰によってアベルはカインより優れたいけにえを神にささげ、その信仰をもって彼の正しさが神に受け入れられた」(11：4)と書いているが、創世記そのものは理由を語っていないので、ここでは「その理由は分からない」という立場で読んでいきたいと思う。というのも、世界には私たちの目に不公平や不条理な現実があふれていて、私たちには納得できないことが多いからである。私たちはカインと同じように不可解な中に生かされている。それが「神が神であり、人が人である」ということ。私たちは「神のなさることを、はじめから終わりまで見極めることはできない」(コヘレト3：11)のである。「神さま、どうしてですか」という問いを抱えながら生きる。それが私たち人間の生なのである。

カインは神がなされることに納得できず、怒りと憎悪で顔を地に伏せた。神の顔を見ようとしなかった。そのカインに神は忠告する。「正しいなら顔を上げよ。正しくないなら、罪が戸口に待ち伏せている。お前はそれを支配せねばならない」と。これも大切なこと。人は神から自由意志を与えられている。神は、神の期待通り命じたことだけを行うロボットとして人を造られなかった。自由意志を持つ、自分で考え、右か左か、真ん中かを選ぶことができる存在として造られた。それゆえ私たちは自分の選びに責任を持つように、その自由を「正しく用いる」ように招かれている。

ところがカインは神の忠告に耳をふさいで「弟殺し」に突き進んでいってしまった。自分の考えていることだけが「正しい!」と考え、周りがまったく見えてないカイン。このカインの姿にわたし自身の姿がそのまま示されているようで恥ずかしくなる。

ここで「弟殺し」を実行していくカインは無言である。いっさい言葉を発していない。アベルを野原に誘ったけれど、まともな会話はせずに「弟殺し」に突き進んでいく。カインは神とも弟ともいっさい話していない。神の問いかけも無視し、耳をふさいで神との対話を拒否している。このカインの姿を見ると、「暴力」とは「対話の否定である」ということを示される。対話し言葉を交わし、相手の言うことに耳を傾け、相手の立場に身を置いて考えてみる。そういう対話的な関係を一切否定し、ただ自分が考える「正義」を有無を言わず実行していくこと。それが「暴力」の本質

なのだ。その「暴力」の本質、罪を抱えた私たちがここで問われているのではないか。

そのようなカインを神は厳しく裁かれる。「お前の弟はどこにいるのか？」という神の問いかけに、「わたしは弟の番人でしょうか」とうそぶくカイン。この姿はこっけいである。神がすべて御存知であり、神の前に自分の罪は明らかに見えていることを想定できていないカイン。「弟の番人でしょうか」という返事で、神の問いをやり過ごせると思ってしまっている愚かさ。この姿にも私たちが抱える罪が示されている。「罪」は神に対して目を閉じること。神のまなざしを忘れること。そして自分の心の中から神を追い出すこと。それが罪なのだ。

しかし、それは「いないないばあ」をする赤ん坊と同じである。赤ん坊は目を閉じて相手が見えなくなると、相手からも自分が見えなくなっていると思うそうだ。それと同じことを、私たちは、神の前にしている。自分の心の中から神を追い出したら、神からも自分は見えていない。だから悪いことをしても平気だと愚かにも思ってしまう。そこに私たちの罪がある。

神はカインの罪を厳しく裁き、語りかける。「お前の弟の血が、土の中からわたしに向かって叫んでいる」と。8月、私たちは土の中から神に向かって叫ぶ、かつての戦争で不条理で理不尽に命を奪われた人々の叫びを聞くように招かれている。私たちは浅はかにも死んだ人の声は聞こえなくなってしまうけれど、大間違い。神の前には死んだ人たちの叫びは今日も届いている。私たちはその声にきちんと耳を傾け、体をむけていく責任があることを聖書は示す。

ただ驚くべきことに、神はそのようにカインを厳しく断罪しながらも、その命を取り上げることなく、カインが血の復讐にあわないように「しるし」をつけられる。なぜなのだろうか。一つはカインに「過去の自分の罪を忘れることなく、過去の自分と応答的に生きるように」教えられたということ。もう一つは神が憎しみと復讐の連鎖を何とかここで絶とうとされたのではないか。それは新約聖書の十字架の主イエスの祈りにつながる。これ以上、私たちが罪を重ねないように、罪の連鎖を断って生きるように私たちは祈られているのである。平和を強く願う祈り神の姿がここにある。

もう一つ今朝の個所で考えさせられること。それは神が求める正しさとは「どのような正しさなのだろうか」ということ。「義」とは「神と人との正しい関係」をいう。その「神と人との正しい関係」とは「対話的關係」。どんなことがあっても、関係を切らない。向かい合い続ける。言葉を交わし合い続ける。そして共に生きる。その関係を神は望んでおられるということ。カインは神がなさったことに納得できず、怒りを覚えて、その怒りを弟にぶつけてしまったが、それは大きなお門違い。カインは神にこそ向かい合い問うべきだった。「なぜですか？」と。私たちは納得できない時は「問うて」よい。ヨブのように「おかしいです、納得できません」と食い下がっている。お行儀よくいつも「はい、はい」と返事をするのが信仰ではない。神としっかり向かい合う、対話的に歩むことが信仰である。そのように神と対話的に生きる信仰を教え導くため主イエスは来てくださった。この方に信仰を教え導かれながら、神と対話し、神が祈り願っておられる「平和」をつくりだす働きに導かれていきたい。